

質の高い大学教育推進プログラム 実施状況報告書

大学等名	山形大学		
取組名称	学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト		
申請区分	上記以外の工夫改善を主とする取組		
取組期間	平成20年度～平成22年度（3年間）		
取組学部等	全学	取組担当者	小田 隆治
Webサイト	http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/kyouiku/		
取組の概要	<p>学生の社会人基礎力の育成を目的として、学生主体型授業を研究・開発し、これを公開授業や合宿セミナー、独自に開発した教材を通して教員間に普及・共有化を図り、全学の初年次教育で実施した。新たな授業の開発・共有化をFDの新段階として位置づけた。最終年度の学期末には、審査委員に企業や高校教師を含め、学生の『課題発表コンテスト』を実施した。このコンテストによって、学内外から学生の能力の育成が高く評価された。</p>		

1. 取組の実施状況等

①. 取組の実施状況 【1ページ以内】

(1) 取組の実施体制

教育担当理事・副学長がセンター長を務める高等教育研究企画センター内にプロジェクトチーム（PT）を編成した。PTの中に学生主体型授業の開発を重点的に担当する「PT作業班」を設置し、学生主体型授業の調査と研究、パイロット授業の開発と実践を行った。本取組の学内への普及と共有化は、PTと教育担当理事が委員長である全学FD委員会の「教育方法等改善専門部会」の連携によって行った。

(2) 取組の実施計画に掲げた内容

○取組の全体スケジュール

- 第一期：学生主体型授業の調査・研究段階（平成20年度）
- 第二期：学生主体型授業の開発・共有化段階（平成21年度）
- 第三期：学生主体型授業の全学実施段階（平成22年度）
（参加教職員総数800名、参加学生総数1,900名）

○各年次の実施計画と実績

【平成20年度】

学生主体型授業開発共有化プロジェクトチームを設置し、このチームが中心となって質の高い授業および授業改善のFDシステムを構築した。

- ・国内外の先進授業の調査（教職員20名）
- ・学生主体型のパイロット授業の設計および試行（教職員7名）
- ・「学生と教員による授業改善アンケート」の実施（教員700名、学生1,800名）
- ・『FD報告書』の発行と配布（教員700名＋全国高等教育機関1,200校）
- ・「先端学習ラボ」と「自習室」の設置

【平成21年度】

学生主体型パイロット授業を実施し、改良を加えながらより汎用性の高い学生主体型授業のモデルを開発し、学内での共有化を図った。

- ・パイロット授業の実施（教職員20名、学生50名）
- ・毎回「公開授業と検討会」の実施（教職員50名、学生120名）
- ・「FD合宿セミナー」の実施（教職員100名（内他大学から40名））
- ・学生主体型授業の教員向けDVDの作成と配布（教員700名）
- ・学生の主体的学習を支援する学習手帳の発行と配布（教員700名、学生1,800名）

【平成22年度】

学生主体型授業を全学で実施した。

- ・学生主体型授業の81コマ開講（教員70名、学生1,800名）
- ・前・後期『課題発表コンテスト』の開催（教職員20名、学生120名）
- ・東京での全国規模のシンポジウムの開催（教職員120名、学生2名）

(3) 社会への情報提供活動

本取組は、ホームページやシンポジウムで全国に情報提供した。本取組の一部はNHKの全国放送、NHKワールドによって世界発信された。新聞に再々掲載された。

②. 取組の成果 【1ページ以内】

本取組は、申請書の計画に示したように、下記のプロセスどおりに進めていき、最終的に、全学の初年次教育において質の高い学生主体型授業を全学生に提供し、目的とした学生の社会人基礎力を育成することができた。

第一期：学生主体型授業の調査・研究段階（平成20年度）

・国内外の先進授業の調査・研究により、汎用性の高い学生主体型授業を開発できた。

第二期：学生主体型授業の開発・共有化段階（平成21年度）

・パイロット授業は、グループワーク、プレゼンテーション及び授業外学習を行うようにデザインし、学生のコミュニケーション力及び課題発見・解決能力の育成を図ることができた。また、授業終了後に学生を交えた授業検討会を実施し、教員間での共有と迅速な授業改善が図られた。パイロット授業は、学期末の「授業改善アンケート」において高い評価を得た（総合評価4.52）。以上より、質の高いモデル授業を開発し、それを学内に共有することが可能になった。

・「FD合宿セミナー」において、授業担当教員に学生主体型授業を体験してもらい、実践的な学生主体型授業を普及することができた。

・ビデオ教材『学生主体型授業へのアプローチ』の作成・配布により、多くの教員がグループワークや学生との双方向性の確保を理解することが可能になった。

・ビデオ版授業改善ティップス『あつとおどろく大学授業NG集』を作成・配布することにより、学生及び教員の授業改善に対する意識の向上を図ることができた。

また、ウェブサイトでの公開により、学内の教職員・学生はもとより、全国の高等教育機関の授業改善にも寄与することができた。

・学習手帳版冊子『Schedule Note for Learning』の作成・配布により、学生は日常的に主体的学習のノウハウを知ることができるようになった。

第三期：学生主体型授業の全学実施段階（平成22年度）

・学生主体型授業を前期に69コマ後期に12コマ開講し、全学で実施した。

・学生主体型授業は、学期末に実施した授業改善アンケートにおいて高い評価を得ることができた。

アンケート項目	学生主体型全体平均	授業平均（教養教育）
考え方、能力、知識、技術などの向上に得るところがありましたか	4.59	4.10
この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか	4.70	4.25

・「課題発表コンテスト」により、企業からも学生の社会人基礎力が高く評価された。

○本取組が学内外に与えた波及効果

学内の多くの教員が双方向型の授業法の必要性を認識し、実際にその実践に向かっていき、学生の社会人基礎力の育成に寄与するようになった。学外の学生主体型授業の普及にも大きく貢献した。「先端学習ラボ」の設置・活用によって、新しい授業法を開発する環境が整った。

③. 評価及び改善・充実への取組 【1ページ以内】

学生主体型授業の改善・充実システムの中心をなす骨格は、「公開授業と検討会」であった。授業には毎回プロジェクトチームの全員が参加し、授業終了後の検討会で授業改善のための検討会を行っていった。

授業の改善・充実のためには、閉鎖的にならずに広く外部の意見を求めなくてはならないので、授業を常時公開し、それをポスターやホームページで広報し、多くの人たちの参加を募った。実際、学内外の教職員が多数参加した。検討会で出た意見を次の授業の改善に生かしていった。

授業検討会には毎回数名の受講生が自主的に参加し、授業に対する忌憚のない意見を述べてくれた。学生との対話を通して、授業の改善・充実が進んでいった。

他大学の教職員や一般の方から授業法や学生に対する高い評価をいただいた。それらは我々の大きな励みとなった。反省ばかりでなく、他者からの賞賛や激励も取組の遂行・充実のために大切であることが今更ながらにわかった。

授業にはSA（スチューデント・アシスタント）として上級生を配置したが、一年生に近い年齢の学生から、毎授業ごと忌憚のない意見を聞くことによって、受講生の内面的な成長がよりよく理解でき、授業の改善・充実の役に立った。

全学で組織的にとる「学生による授業改善アンケート」だけでは、学生主体型授業の教育目標の達成度の評価をすることができないので、コミュニケーション能力や課題発見・解決能力をたずねるアンケートを個別の授業で実施し、授業の詳しい分析を行った。この分析データを使って評価点検を行い、授業の改善・充実に生かした。

取組全体の年度毎の自己評価はPTで行った。評価のために使った基礎資料は次の通りである。①学生主体型授業の調査・研究報告、②学生による授業改善アンケート、③授業担当者の聞き取り調査、④「公開授業と検討会」の記録、⑤「FDワークショップ」のポストアンケート、⑥「FD合宿セミナー」の記録とポストアンケート。以上の基礎資料を踏まえて点検・評価した。

本取組の成果を学会等で発表し、全国の研究者や関係者から意見を聴き、改善に努めた。

学外の高等教育の専門家5名からなる「外部評価委員会」を設置し、毎年、点検・評価を年度末に受け、次年度の計画に生かしていった。ここで提言された意見などは年度末に発行した『FD報告書』に掲載し、それを全教員に配布し改善の共有化を図った。

本取組の到達目標である「社会人基礎力の育成」を点検・評価するために、取組3年目に学生による『課題発表コンテスト』を実施し、審査員である企業の人事担当者、高校の進路指導担当教員、大学の人事担当者、大学の教員が教育の成果である学生の発表を聞き、その質疑応答を通して、学生の能力評価を通して、この取組の成果をダイレクトに評価した。

以上の学内外の評価を受けて、PTで総合的な取組評価を行い、取組終了後の活動に生かしている。

④. 財政支援期間終了後の取組 【1ページ以内】

財政支援終了後、FDや取組の中核を担っていた高等教育研究企画センターは教育開発連携支援センターに改組されたが、取組を担当していた教員と職員の大半はそのままセンターの仕事に従事し、本取組を含めたFD活動を継続して実施している。継続に必要な経費は、学長裁量経費から安定的に供出されている。

現在、全学展開した学生主体型授業の改善・充実を継続して進めており、さらに学部 of 専門教育への応用にも生かしている。

本年度も「FDワークショップ」、「FD合宿セミナー」、「学生による授業改善アンケート」、「公開授業と検討会」を進め、学生主体型授業の改善・充実に努めている。

得られた成果は、これからも学会や研究会を通して発表していく。また、東日本47大学等からなる「FDネットワーク“つばさ”」の場で成果を共有する。さらには、他大学等のFD講演依頼に応え、講演を通して学生主体型授業を全国に普及していく。

本取組はこれまでと同様、専用のホームページで情報を発信していく。財政支援期間中に取組担当者が編者となって全国の先進的な学生主体型授業の事例を集約した実践集『学生主体型授業の冒険』（ナカニシヤ出版、2010）を刊行し、全国の大学教員に活用されている。2011年には、この続編の本を刊行する予定である。

以上のように、本取組は多様な媒体を活用して、学内のみならず全国に質の高い実践性のあるFDと学生主体型授業の授業法の普及を積極的に図っている。

継続するための課題及び問題点は、財政支援によって雇用されていたスタッフがなくなったことにより、パワーが半減したことである。また、財源がないので「課題発表コンテスト」を開催することができないのは、この教育的効果の判定とステークホルダーの意見聴取ができなくなったことから残念なことである。

○教育の質的向上に向けた改善・充実を図る計画

我々はこれまでFDによって既存の授業を改善し、さらに新たな授業形態である学生主体型授業の開発・改善にも努めてきた。後者の新規授業プログラムは15回の授業すべてを使って社会人基礎力の育成のような独自の教育目標を達成するものである。しかし、2単位の授業科目1つだけで、学生の主体性や課題発見・解決能力、行動力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力などを十分なレベルまでに引き上げることは不可能である。こうした能力は、学士課程全体で伸ばしていかなければならない。当然、学問を教える授業の中に、こうした能力を伸ばすための工夫が必要となってくる。だが、多くの教員はこの目標に対して無自覚であったり、たとえ自覚していても、どのような教育方法をとればいいのか分からない教員も多い。そこで、15回の講義の中に数回の双方向型の授業法を取り入れたり、毎回の授業に10分程度のグループ学習を挿入するというような授業の工夫が求められている。様々な学問分野の授業に活用できる汎用性の高いモジュール型の授業法の開発と普及、共有化が求められるようになってきた。学士課程全体で教育目標に到達するためには、このモジュール化した授業法の開発は全ての大学で求められている。学生主体型授業のプロジェクトチームでこのことにチャレンジし、成果を世界に発信していきたい。

2. 取組の全体像 【1ページ以内】

山形大学は教養教育の改善・充実を図るために、平成11年度より、授業改善に有効な実践的FD（図1）を進化させてきた。これまでの実践的FDは既存の授業の改善を主目的としてきたが、本取組では、実践的FDを基盤として、学生主体型授業という新しい授業法の開発、組織内での共有化、持続的な改善・充実を図っていった。この取組をFDの新段階に位置づけている。本取組の全体像を図2に示す。本取組の到達目標は、

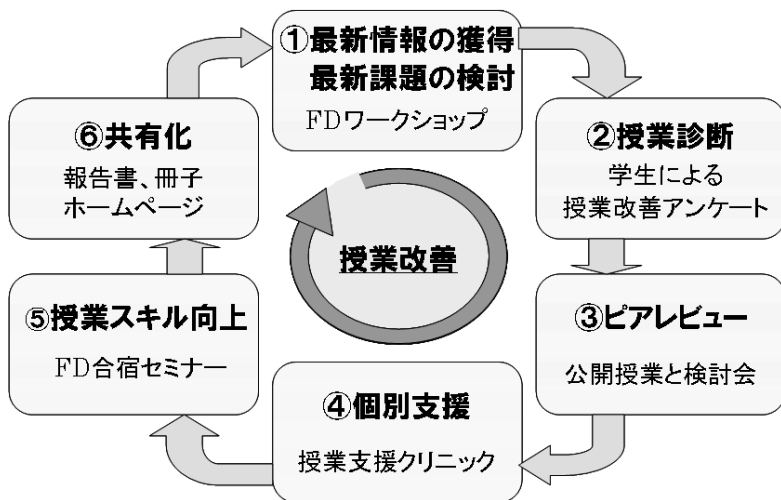


図1 実践的FDの概要

平成22年度の教養教育において質の高い学生主体型の教養セミナーを受講することによって、学生が社会人基礎力を身に付けることにあった。この目標を達成するための計画を立て、その中に種々の工夫を組み込み、それを着実に実行していった。第一期は、学生主体型授業の調査・研究を行い、汎用性の高い学生主体型授業を開発し、翌年度のパイロット授業の設計とシラバスを完成させた。開発した学生主体型授業の骨格は、グループ学習（調査・討論）－発表－全体討論－相互評価から構成した。第二期は、パイロット授業を実施し、改良を加えながらより質の高い学生主体型授業のモデルに育て、授業の公開やシンポジウムなどを通して学内に共有化を図っていった。授業は学生主体型授業の研究・開発のために設置した教室「先端学習ラボ」で行った。第三期は、初年次の全学生を対象とした学生主体型授業を年間81コマ開講し、「公開授業と検討会」で改善を加えていった。学生主体型授業群は「学生による授業評価」の総合評価（5点満点）で4.70というとても高い評価を得た。また、企業人や高校の進路指導教員などを審査員とする学生の『課題発表コンテスト』の場で学生たちの能力は高く評価された。本取組で得られた成果は、「FDネットワーク“つばさ”」や全国規模のシンポジウムで情報発信され、全国の大学関係者から高い興味を持たれている。取組後も学生主体型授業の改善を行い、専門教育への応用にも活かしている。

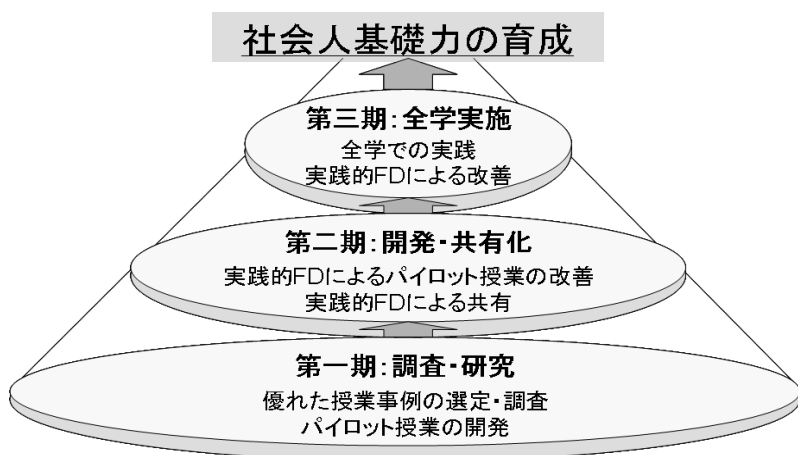


図2 学生主体型授業開発共有化FDプロジェクト

グループ学習（調査・討論）－発表－全体討論－相互評価から構成した。第二期は、パイロット授業を実施し、改良を加えながらより質の高い学生主体型授業のモデルに育て、授業の公開やシンポジウムなどを通して学内に共有化を図っていった。授業は学生主体型授業の研究・開発のために設置した教室「先端学習ラボ」で行った。第三期は、初年次の全学生を対象とした学生主体型授業を年間81コマ開講し、「公開授業と検討会」で改善を加えていった。学生主体型授業群は「学生による授業評価」の総合評価（5点満点）で4.70というとても高い評価を得た。また、企業人や高校の進路指導教員などを審査員とする学生の『課題発表コンテスト』の場で学生たちの能力は高く評価された。本取組で得られた成果は、「FDネットワーク“つばさ”」や全国規模のシンポジウムで情報発信され、全国の大学関係者から高い興味を持たれている。取組後も学生主体型授業の改善を行い、専門教育への応用にも活かしている。